

## トンガ王国における障害者施設歯科医療ボランティア活動 - 現地歯科医療スタッフとの協力内容の変化 -

○遠藤眞美<sup>1,2)</sup>・河村康二<sup>2,3)</sup>・河村サユリ<sup>2,3)</sup>・小林清吾<sup>2,4)</sup>

- 1) 日本大学松戸歯学部障害者歯科学講座
- 2) 南太平洋医療隊
- 3) カワムラ歯科医院
- 4) 日本大学松戸歯学部社会口腔保健学講座

### 【活動目的】

1998 に発足した南太平洋医療隊(隊長:河村康二)はトンガ王国(以下,トンガ)で歯科保健医療ボランティア活動を行っている. 活動内容は,ヘルスプロモーションの考えを軸に現地歯科医療スタッフ(現地スタッフ)と協力をして地域に対する食事・栄養改善,学校保健システムの確立および予防歯科保健システムの推進を目的としている. 具体的には,幼稚園と小学校でのフッ化物洗口や健康保健教育,住民に対するオーラルヘルスフェスティバル開催などである.

2005 年からは同隊の活動としてトンガの障害児・者施設における活動を開始した. 目的はトンガの障害児・者施設利用者の健康支援と利用者が口腔領域に関する保健活動や医療を円滑に受けられるような現地スタッフと施設の連携作りの支援である. 今回,障害者施設における 2005 年から 2008 年までの本隊の活動内容の報告および現地スタッフとの協力内容について考察する.

### 【活動内容】

対象施設は,トンガ本島の障害児・者施設(通園施設と入所施設の各 1 施設)である. 通園施設には,曜日ごとにグループ通園をしている発達障害児・者のクラスと毎日通園の聴覚障害児・者のクラスがある. 入所施設では,通園している聴覚障害児・者を含む約 20 人が生活している.

2005 年~2007 年の活動開始初期には本隊の都合の良い時間に施設を訪れ,現地スタッフと施設スタッフに対して障害などの知識普及,施設利用児・者の歯科健診,口腔ケアに関する支援(物品寄付,本人・保護者への歯磨き指導)および食事に関する支援(食内容・食環境指導,機能訓練)を行った. 施設滞在の日本人ボランティア(JICA 所属)との連携を積極的にはかったが,通年を通じた支援にはつながらなかった.

2008 年には過去 3 年間と同様の内容に加え,現地スタッフと共に通園施設には午前中から施設終了時間まで訪れ,その後,入所施設へ出向き利用者と日常生活を過ごした. 入所施設では利用者がトンガ語教室やトンガのダンス教室を開催してくれ利用者との積極的な交流がはかれた.

## 【成果】

過去 4 年間のトンガにおける障害児・者の施設での本隊の活動は本隊中心型から現地スタッフとの協力型へ移行している。現地スタッフの活動変化として現地スタッフが、①利用者のアセスメント方法、器質的および機能的口腔ケア方法を修得し、利用者、保護者、施設スタッフに指導、②器具の整備(用意、消毒)、③歯ブラシ管理方法の検討、④施設内に展示する口腔保健に関するポスター作製などを積極的に行うようになった。また、活動初期には勤務時間中のみ活動協力を行っていた現地スタッフが研修や計画立案などを自主的に勤務時間外にまで行うようになった。

日常生活を共にすると現地スタッフだけでなく施設利用者、施設スタッフらと本隊の共有時間が増えコミュニケーションが充実し相互理解につながった。入所施設利用者の一部を除いて両施設において利用者は歯ブラシを共同で使用していた。しかし、そのことに利用者、保護者および施設スタッフの抵抗がなく、個人指導を勧めるも個人使用には至らなかった。現地スタッフと相談し歯ブラシに利用者の名前を記載してから寄付した。すると、本人、保護者および施設スタッフが何度も個人使用を推進していたにも関わらず、その後は歯ブラシを個人で使用するようになった。また、2007 年までは毎年の最終訪問時に 1 年分の寄付物品を施設職員に贈呈していたが、その多くが本人に使われていないこともわかった。この問題点に関して、また、名前を記載した歯ブラシを現地スタッフが保管し本隊が帰国後も定期的に施設訪問して歯ブラシを交換するシステムに改善した。これら活動の発展的展開により本隊帰国後も理由ある訪問が実現し、通年を通した現地スタッフと施設職員の顔の見える活動につながっている。

## 【考察】

国際保健活動には現地の協力が不可欠であるのは当然である。しかし、一度の訪問で十分な協力体制を確立することや信頼関係を確立することは困難である。本活動のように活動の継続は現地スタッフ、利用者、保護者、施設スタッフらと本隊の共有時間を増やし、コミュニケーションの充実につながると考えられる。十分なコミュニケーションは、活動者と現地スタッフなどとの個人的な価値観や人生観などの理解だけでなく、それぞれの国民性や宗教観、死生観、健康観などの円滑な相互理解となり、信頼関係の確立に作用して活動を積極的に受容する重要な事項となる。本活動においても、充実したコミュニケーションによって現地スタッフが活動を積極的に受け入れ、活動計画立案から熱心に協力し、様々な意見を発言するようになった。コミュニケーションや文化の理解が、本隊の一方的な活動を協力型の活動へと幅を広げたと考えられた。

発表者の連絡先

日本大学松戸歯学部 障害者歯科学講座  
〒271-8587 千葉県松戸市栄町西 2-870-1  
電話・FAX : 047-360-9443  
Email : endoh.mami@nihon-u.ac.jp